

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In Honour of Professor Ryuichi Adachi

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 益岡, 隆志, Masuoka, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1628

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



安達先生を送る

益岡隆志

安達先生は日本語学担当の教授として1981年4月に本学に赴任され、18年間本学において研究と教育に力を注がれました。先生のためまぬご努力によって日本語学という分野が本学において安定した地位を得るに至りました。

安達先生の日本語研究は、歴史的研究と現代語の記述的研究という二つの領域がその対象となっています。歴史的研究と現代語の研究が分化した形で行われている学会の動向にあって、一方の領域に偏ることなく広い視野から研究を進められたことは、先生の学問の一大特徴であると言ってよいと思います。そのようなスケールの大きい学問を実践された先生が本学の日本語学を育て上げられたことは、私たちにとって非常に幸運なことだったと思います。

安達先生の学問について詳しく語ることは私の力の及ぶところではありません。ここでは先生の学問の輪郭を素描することでお許しをいただきたいと思います。先生のご研究の一方の柱である日本語の歴史的研究においては、キリシタン文献を資料とする中世日本語の研究と近代日本語構文の成立過程の研究がその中心となるのではないかと思います。もう一方の柱である現代日本語の研究においては、文を超える単位としてのテキストの構造を記述する文章論の研究がその中心となっています。文を対象とする文法研究の方法論を拠り所としてテキスト研究を進めていこうとする先生のお考えは、ご著書『構文論的文章論』においてあますところなく示されています。文法研究の重点が文から談話・テキストへと移行しつつある現在の学会の動向を考え

るとき、先生の文章論（テキスト論）の研究成果はこれからますます重要な意義を持つことになるに違いありません。

こうした研究を深められる一方で、安達先生は日本語学を本学に根付かせるために精力的に多くの課題に取り組みました。本学の日本語学の歴史は先生の創造的な活動と共にあったと言っても過言ではないでしょう。本学で学部・第2部に日本語学を中核とする日本語学課程が発足したのは先生が赴任される1年前の1980年のことでしたが、発足当初の状況は必ずしも順風満帆とは言えないものでした。日本語学課程がある程度の定着を見るようになったのは1984年頃からであり、そのような状況の進展は安達先生の力に負うところが大きかったのです。

本学の日本語学の研究教育体制が飛躍的に発展する契機となったのは1991年の大学院修士課程日本語日本文化専攻（1999年に「日本アジア言語文化専攻」と改称）の発足でした。そして、日本語日本文化専攻の設置の実現のために中心的役割を果たされたのが安達先生でした。先生のご尽力により発足した日本語日本文化専攻は着実に日本語学の研究教育体制を充実させていき、その後1996年に設置された大学院博士課程文化交流専攻言語コースの中に日本語学が配置されたこと、同年発足した学部総合文化コース内に日本語学が位置づけられたことにより、学部から大学院博士課程に至る日本語学の研究教育体制が確立することとなりました。

安達先生はこのような日本語学の研究教育体制の整備を推進されただけでなく、日本語学を志す学生たちに対する指導に情熱を注がれました。先生の指導のもとに日本語学を修めた学生たちは異口同音に先生の教師としての偉大な業績を讃えています。もし安達先生がいらっしゃらなかったならば、本学の日本語学の発展はなかったに違いありません。

安達先生、長い間本当にお世話になりました。これからも本学の日本語学の歩みをあたたかく見守って下さいますようお願い申し上げます。